魔法少女リリカルなのは 最強なのに介入したくない転生者

００フリーダム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　最強なのに介入したくない転生者

【Ｎコード】
Ｎ３８５１Ｎ

【作者名】
００フリーダム

【あらすじ】
自殺して死んだはずなのに気が付いたら目の前で土下座している人。俺の自殺が成功したのはあんたのせいだと！！　しかも転生しろかよ

転生者の中で最強の力を持ちながら原作に関わろとしない転生者の物語が始まる

始めに、そしてアンケート　（終了しました）（前書き）

本編の前に伝える事が有ります。

始めに、そしてアンケート　（終了しました）

いきなりですが本編をやる前にアンケートです
ガンダムシリーズで出してほしいキャラや機体があったら攻撃のランクなどを書いて感想の所に書いてください。締め切りは十話ぐらいです。

出せるキャラはX、ＳＥＥＤ、ＤＥＳＴＩＮＹ、００、です
敵か味方かは後で決めます。希望があったら機体と一緒に書いてください。
００の映画キャラについては映画を見てからです。

アンケートお待ちしています。

次からはちゃんと本編をやります。出来たら見てください。

始めに、そしてアンケート　（終了しました）（後書き）

次からが本編です。

大体五話事にかなり長い間が空きます。

プロローグ（前書き）

これを読む前に始めに、そしてアンケートを出来たら読んでください。

ではプロローグどうぞ

プロローグ

ありえない。

俺は、自殺したはずなのに何故よく二次小説で有るような真っ白い空間にいる。何故？

？「ごめんなさい！！」

えっ。神様的な人が土下座しています。何故？

神「そうです。私は神です。私のせいで貴方が死んでしまったので転生させます。」

いや俺は自殺だし。殺されたもないだろう。それに、このまま天国か地獄に行きたいんだけど。

つうか心読んでる？

神「はい。読んでます。それに、私が殺さなかったら貴方の自殺は失敗していました。それとそうすると私が首になるのでダメです。」

さいですか。ところで何処に転生するの？

神「魔法少女リリカルなのはです。」

まあ、新しく生きて原作ブレイクもいいか。能力や他の転生者は？

神「変な人ですね。転生者は複数いる見たいです。能力は考えてください。」

なら……にしてくれ。

神「色んな意味で最強ですよ？」

これぐらいやらないと死ぬ。

神「まあ、そうでしょう。それとその世界は平行世界であって色々イレギィラーがあると思います。それに転生者がかなりいます。」

わかった。

神「それでは今度は自殺しないで下さいね」

そう言われ俺の意識は無くなった。

プロローグ（後書き）

？「俺の名前出て無いけど」

お前の名前出るのは二話からだから

？「ふざけるな！！」

次回、第一話　です　次からはちゃんと次回予告やります。

アンケートお待ちしています。

？「無視するなーー！！」

第一話　原作介入。なわけあるか！！（前書き）

第一話です。

まだ主人公の名前やデバイスはでません。

第一話　原作介入。なわけあるか！！

転生した。いやー人間そう簡単に変わらないね。んっ何故そんなこと言うか。何故ならもう小学四年生だからです。
えっ。無印、Ａｓ、知らないよ。

確かに俺だって四歳の頃までは介入使用と修業したりしましたよ。だけど四歳の時に色々あって関わりたくなくなったんだよ

ちなみに原作キャラには偶然少しだけ会いました。　無印やＡｓの時に。少し巻き込まれたりして何人かは知り合いだけどさ

後、この前、翠屋の前を通ったら転生者的なやつが三人くらいいたが一人いないはずなんだが何故か別の人間がいた。まあそれで俺は原作介入しなくても問題ないだろ。
まあそんな感じで四年生になった。運がいいことに今までなのは達とはクラスが違った。

だが何故だ。何故四年生になって一緒のクラスになるーーーーー！！

幸い席はかなり離れている。まあ、いいや。かかわらなければいいし。

だが甘かった。世界はそんなに優しくない。

第一話　原作介入。なわけあるか！！（後書き）

？「いいかげん俺の名前をだせーー！！」

次な

？「出さなかったらゆるさない」

次回は第二話です

次回予告は三話あたりからやっぱりしようと思います。

？「アンケートもよろしくお願いします。」

第二話　この世界に神なんかいねーー！！あったけど（前書き）

二話めです

ようやく主人公の名前やデバイスがわかります。

アンケート、感想お待ちしています。

『』は念話です。

第二話　この世界に神なんかいねーー！！あったけど

あ～あ何故三年まで一緒のクラスじゃなかったのに何故なんだー。
？『あきらめたら？竜夜』
竜夜『いいたくもなるだろ。キラ。』

今、念話してきたのは俺のデバイスであり相棒である、ガンダムＳＥＥＤＤｅｓｔｉｎｙの主人公的な存在のキラ・ヤマトだ。

キラ『誰に説明してるの？』
竜夜『気にしたら負けたぞキラ。』
キラ『はあー。で、どうするの？』
竜夜『決まっている。介入しない。』
キラ『なんで？』
竜夜『静かに暮らしたいだけ。』
キラ『……竜夜本当にそれでいいと思うの？』
竜夜『……さあな。』
キラ『で、それよりいいの？』
竜夜『何が？』

キラ『席替え。勝手に決められてるよ。』

竜夜『別にどうでもいいしな。』

キラ『今更、後の祭になっても知らないよ。』

竜夜『何が？』

キラ『横見て見たら。』

竜夜『横？』

そう言われて横を見たらそこには、

なのは「あっ。よろしくね。えっと竜夜君！」

魔王様がいました。

この世界に神はいない。あったけど。

第二話　この世界に神なんかいねーー！！あったけど（後書き）

竜夜「ようやく名前がでた」

よかったな

キラ「うん」

竜夜「人事見たいに言うな！！」

事実人事だよな？

キラ「確かにそうだね」

竜夜「あのなーー」

次回は三話目です

キラ「よろしくお願いします」

竜夜「最後まで喋らせろーーー！！」

アンケートお願いします

第三話　俺をほっといてくれ！！（前書き）

第三話です

四人の方が感想を書いてくれました。

アンケートはまだ一機だけです

お待ちしています。

第三話　俺をほっといてくれ！！

最悪だ。

なんでなのは（魔王）が隣になる。

キラ『あきらめたら。それで原作介入する？』

竜夜『それだけはいやだ。』

キラ『そう。』

なのは「……夜……竜夜君！！」

竜夜「何かようか。高町。」

なのは「あのね、教科書忘れちゃったから見せてくれないかな？」

普通の男子ならこうゆうのを望んでいるんだろうが俺はどうでもいい。しかも相手が高町なのは（魔王）ならば

竜夜「ほら。授業が終わったら返せばいい。」

そう言って外を見ながらキラとの念話に戻った。

なのは「ふぇ。ダメだよ。授業をしっかり受けようよ。」

竜夜「全部理解してるからいい。」

なのは「えーーー！！」

そんな大きな声で言ったら、
先生「高町。授業を聞くきが無いのか。」
先生に注意される。
なのは「えっ。ちっ違います！！」
先生「ならこの問題を解いて見ろ！！」
なのは「えっえーと。」
キラ『助けてあげたら。』
竜夜『なんで。』
キラ『だって竜夜があんな事言ったからでしょう。』
竜夜『……わかったよ。』
どんな問題かと思ったら……Ｘ＋６Ｘ－７Ｙ＋７Ｘ－５５＝……
小学生にだす問題じゃないな。
竜夜「高町。」
と小さい声で話しかけた。
なのは「えっ。」
竜夜「答えは１４Ｘ－７Ｙ－５５だ。」
なのは「ふぇ。あっ１４Ｘ－７Ｙ－５５です。」

先生「ちっ。……やれば出来るじゃないか。」
なのは「あっ、はい。」
そのあとクラスの奴らが高町さん凄いやなのはちゃんやるやないかーとか言っていた。
なのは「あの竜夜君。」
竜夜「……なんだ。」
なのは「ありがとう。」
竜夜「……気にするな。」
キラ『やっぱり竜夜はなんだかんだ言って優しいね。』
俺は後で後悔した。
この時、何もしなかったらあとで何もおこらなかったと思う。

最悪だ。
なのは「ねぇ。私の友達と一緒にお昼ご飯食べようよ。」
ただ今なのは（魔王）に弁当を一緒に食べようと誘われてる。
ふざけるな俺をほっといてくれ！！

竜夜「遠慮する。」

なのは「なんで！！」

？「どうかしたんか？なのはちゃん」

？「どうしたのなのは？」

なのは「あっ。はやてちゃん。フェイトちゃん。」

何故関わりたくないやつばかり来るんだ。

キラ『竜夜どうする？』

竜夜『決まっているだろう。』

なのは「あのね竜夜君がお昼さっそたんだけど断られたの。」

アリサ「あんた何か用事とか有るわけ？」

竜夜「とくに何も無いが。」

？「だったらなのはの誘いを断るな！！」

誰？

キラ『もしかして転生者なんじゃ……。』

竜夜『ナイナイ。』

キラ『竜夜かなり動揺しているよ。』

アリサ「そうよ。高也の言う通りよ。断るんじゃないわよ！！」

竜夜「だから……」

それ以上何も言えなかった。何故ならアリサに

アリサ「問答無用！！」

と言って首のえりを捕まれ無理矢理連れて行かれた。

そして今屋上にいる。

なのは「ごめんね竜夜君。」

竜夜「もういい。」

それよりもさっきから俺に殺気を放ってる高也とやらをどうにかしてくれ。何がそんなに気にくわない！！

キラ『多分竜夜がなのはちゃんと話しをしているからだと思うよ。』

竜夜『やつあたりか。』

？「高也そんなに殺気を放つなよ。」

？「確かにね。」

高也「黙れ！！空斗に蒼助！！」

成る程転生者はこの高也、空斗、蒼助の三人か。多分空斗はフェイト、蒼助ははやてと付き合ってるな。それにしてもおかしいフェイトがなんで空斗だったかとなんだ？

確か無印の時あいつがフェイトを手伝っていてアスランもそういっていたが……後蒼也は何処かで会った気がする

と考えていたら。

なのは「あの時ありがとうね。」

……まさか。あの時の事覚えているんじゃ。

竜夜「何の事だ？」

なのは「算数の時間の」

竜夜「あれか。別に御礼を言われることじゃない。」

すずか「えっ。あれなのはちゃんが自分で解いたんじゃないの？」

なのは「うん！！竜夜君が隣で教えてくれたんだよ。」

アリサ「やっぱりね。だけどあんたよくわかったわね。」

竜夜「別に普通だ」

止めてくれ。転生者らしき奴三人の眼がこっち見て来たよ。

キラ『一応常時魔力とかは０にしてあるから大丈夫だと思うけど。』

竜夜『サンキューキラ！！』

さてとぼろが出ない内に帰ろ。

竜夜「食い終わったから帰るからな。」

そう言ってとっとと教室に帰った。

空斗ｓｉｄｅ

あいつ何物だ。

蒼助「どう思う空斗に高也？」

空斗「わからない。イレギィラーか転生者かはまだ。スローネどう思う？」

と俺は長年の相棒に聞いた。

スローネ「わかりません。ですが魔力は０でした。」

空斗「高也はどう思う？」

高也「わからねえー。だけど」

蒼助「だけど？」

高也「なのはに手を出すんならただじゃ済まないからな。」

空斗「はあ～。お前の彼女じゃないだろ。」

高也「いつかしてみせる。」

空斗『高也』

高也『なんだ』

空斗『計画の邪魔になるようなら』

高也『わかっている消す』

とさっきとは違い冷徹に言った

空斗　side　out

第三話　俺をほっといてくれ！！（後書き）

竜夜「何で巻き混まれているんだよ」

まあしょうが無いだろ

キラ「？うん。」

竜夜「次回は関わりたく無い」

無理！！

キラ「次回のを見たら多分ヒロインが分かると思います。」

見てください！！

竜夜「もういやだ……」

アンケート、感想を待ちしています。

第四話　過去であった事　あそこに行かなきゃよかったー（前書き）

第四話です

今回は五人の方が感想を書いてくれました

今回の話し書いて何だけど変？

とりあえず見てください。

今回の話しは前回の後になります

第四話　過去であった事　あそこに行かなきゃよかったー

アリサ「そういえばさーなのは。」
なのは「なにアリサちゃん？」
アリサ「あんたまた告られたんだって。」
なのは「えっ、う、うん。」
はやて「でどうしたんや？」
なのは「断ったけど。」
フェイト「なんで？」
アリサ「好きな人でもいるんじゃないの？」
すずか「まさかー。」
空斗「ありえるな。」
蒼助「なんで？」
空斗「なのはを見てみろ。」
と言われ見てみると、
なのは「……／／／」

真っ赤に顔をしていた。

高也「誰なんだ！！なのは！！」

空斗「必死だな」

フェイト「そりゃそうだよ。」

蒼助「高也はなのは事が好きだからね」

アリサ「なのは」

なのは「なっなにアリサちゃん？」

アリサ「教えなさい」

なのは「なにを？」

アリサ「なのはが好きなのは誰かよ！！」

すずか「力になれるかも知れないから」

なのは「えーっとね誰かわからないの」

空斗「どうゆう事だ？」

なのは「それがね顔はうっすら覚えているんだけど名前は知らないの」

フェイト「どうして？」

なのは「えっとね出会ったのはね私が小学生になる前だから五才の時お父さんがね大怪我して入院してそれでお母さんとお姉ちゃんはお店で忙しくてお兄ちゃんは何か怖かったの。」

はやて「怖かった？」なのは「うん。よくわからなかったけど怖かったの。それで私はいい子でいようとしたのだれにも迷惑をかけない、そんな子でいようとしたの」

アリサ「それって」

なのは「うん。おかしいよね。怖くなったら親に抱き着いて泣いたりすればいいのにそれをせず泣くこと自体が人に迷惑をかける悪い子って決めつけていたんだ。それで誰にも泣いている所を見られたくなかったから私は公園で泣いていたんだけどねそこで私に声をかけてくれたんだ。どうして泣いているんだ？てそれで事情を説明したらなんて言ったと思う？」

高也「何て言ったんだ、そいつ！！」

なのは「あのね、『バカじゃあねーの！！』って言ってきたんだよ。」

アリサ「はぁーーー！！」

すずか「それはまた。」

蒼助「無防備な所から」

空斗「そこは普通友達になろうか、一緒に遊ぼうじゃにいか？」

なのは「うん。私もその時は反抗して『どうしてそんなこと言うの

！！』って言ったんだ。でもねその後言われた言葉に私は救われたんだ。」

高也「何て言いやがったんだそいつ！！」

空斗『必死だな。』

蒼助『まあ、自分の好きな人に好きな人がいたら必死になるのも分かるけど』

はやて「確かに何て言ったか気になるなあー。」

フェイト「うん。」

なのは「えっとね言い返したらね

［周りに迷惑だ！！

無理している方が周りから見たらはた迷惑なんだよ！！

怒りたかったら怒ればいい。

笑いたかったら笑えばいい。

泣きたかったら思い切り泣けばいいんだよ。人は泣けるから人なんだから。

家に帰ったら家族に自分の思いをぶつけてみろ。

お前が正直に自分の気持ちをぶつければお前の家族も正直に答えてくれるはずだ」って。」

すずか「そんなことといったんだ。」

はやて「いい事いうな～」

フェイト「うん」

アリサ「確かにそうね。」

空斗「……」

蒼助「うん。確かに」

蒼助『竜夜そんな事言っていたんだ』

空斗「それより高也は？」

蒼助「あそこで灰になってるよ。」

と高也がなのはの話しを聞いて灰になっていた。

竜夜ｓｉｄｅ

竜夜「はくしゅん！！」

俺はキラと教室に戻ってなのはと初めて会った時の事を話していた。

キラ『風邪？』

竜夜『いや多分噂だと思う。』

キラ『気をつけてね。それでなのはちゃんに言った後どうしたんだっけ？』

竜夜『ああ。それで帰ろうとしたらいきなり抱き着いて来て泣いたんだよ。』

キラ『焦ったでしょ。』

竜夜『あたり前だろ。それで泣き終わったら家の人が仕事しているから終わるまで一緒にいてとか言ってきたんだよ。』

キラ『それで帰るまで遊んだんだっけ？』

竜夜『まあな。それで帰ったら家族と話す事を約束して帰ろうとしたら寝ていたんだよ』

キラ『送ったんだっけ』

竜夜『ああ。って覚えてるだろ、キラ！！」

キラ『さあね。それで翠屋まで行って桃子さんに会ったんだっけ』

竜夜『ああ。それにしても焦ったよ。事情を説明したらご飯食べて行きなさいとか言われて。』

キラ『御礼を言われただけでいいのにね。』

竜夜『ああ。それで適当にはぐらかして家に帰ったんだよ。』

キラ『あの時が一番速く走っていたよね。』

竜夜『あたり前だろ。それにしてもあの時あの公園に行かなきゃよかった。』

キラ『いや。あの時期はなのはちゃんが公園で泣いているのを知っていたよね？』

竜夜『いやまさかあの公園だとは思わないだろ。』

キラ『まあね。そういえば家に帰った後士郎さんの所に行ったんだっけ？』

竜夜『ああ。それにしてもあいつら何やっているんだ。もうチャイムが鳴るぞ。』

竜夜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

なのはｓｉｄｅ

私はみんなに昔出会った、私の好きな人と出会った時の事を話した。

フェイト「それで好きになったの？」

なのは「うん／／／」

はやて「うん。運命の出会いやな。」

高也「抱き着かれた。……運命の出会い。」

空斗「やばいな。高也が壊れちまったな。」蒼助「しょうが無いかも。」

アリサ「でも今はどんな奴なのかしら。」

すずか「たしかにね。」
なのは「うん。でも、もう一度会いたいんだ。」
空斗「特徴とか無いのか？」
なのは「う～ん。髪と眼が黒かったぐらいかな。」
蒼助「髪と眼が黒い。」
アリサ「そんなやつたくさんいるわよ。」
なのは「あっ。あと肌が少し違ったような」
空斗「肌が違うか。」
キンーコンーカンーコン
「「「「「「「「「……チャイム」」」」」」」」」
空斗「やばい！！」
アリサ「急ぐわよ！！」
フェイト「わかった」蒼助「高也はどうする？！」
空斗「今は何を言っても無駄だ。置いていくぞ！！」
はやて「そやな。」
と灰になっている高也を置いていった

第四話　過去であった事　あそこに行かなきゃよかったー（後書き）

竜夜「あの時あそこに行かなかったら」

キラ「今更なにを」

かなり変な事言っていたよな

竜夜「自分でも変だと思ったよ」

キラ「まあ竜夜は結構優しいからね」

竜夜「違う！！」

それは置いといて

次回は第五話です。

キラ「遂に竜夜の力が分かる！！」

まあかなりリミッターを付けてやらせるけど

竜夜「俺に死ねと？！」

キラ「次回もお楽しみにー！」

竜夜「無視するなー！！」

感想、アンケートを待っています。

第五話　久しぶりの力の解放！！　貴様を破壊する！！（前書き）

第五話です

書き溜めてたのが無くなったのでしばらく更新ができません。

後今回の戦闘でガンダムが出せませんでした。ごめんなさい

今回は戦闘です

戦闘書くの難しいですね

アンケート、感想を待っています

ではどうぞ！！

第五話　久しぶりの力の解放！！　貴様を破壊する！！

あの席替えで隣がなのは（魔王）になって、一週間たった。

変わった事は、まず、なのは達が俺をよく昼食に誘うようになった。関わりたくないから断ろうとするとアリサが首を掴み無理矢理連れて行かれるので諦めかけてる。次に転生者達の眼が怖い。何とかごまかしているがいつまでごまかせるか。

竜夜『はぁー』

キラ『どうしたの』

竜夜『いやもう疲れてな』

キラ『どんまい。とりあえず今日は学校は終わりだから』

竜夜『そうだな』

今日は学校が終わって帰ろうとした。

最近、学校が終わるとなのは達が翠屋に誘って来る。

さすがに桃子さんや士郎さんに会うのはまずいから適当に言って行かない用にしている。今日はなのは達がいなかった。どうやら管理局の仕事があるみたいだ。

何事も無く帰ろうとしたら下駄箱に有り得ないものがあった。

竜夜「……何これ」

キラ『見れば分かるでしょ』

竜夜『いやいやありえないだろ』

キラ『いやだってそれ以外あり得ないよね』

竜夜『何故俺に？』

キラ『いや手紙だよ』

竜夜『ラブレターなわけないだろ』

キラ『とりあえず見て見たら』

といわれ見てみた。そりゃあ緊張するよ。前世でラブレターなんか貰った事なんかないから緊張するよ。

竜夜『さて内容は、［貴様に大切な話しがある。放課後屋上に来やがれ。待っているからな！！］なにこれ。』

キラ『なにこれじゃないよ』

竜夜『いやだってさ』

キラ『とりあえず行ってみたら？』

竜夜『はぁー。嫌な予感しかしないな』

俺は此処から屋上に向かった。

竜夜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

高也ｓｉｄｅ

あの日なのはの好きな奴を聞いてからそいつを捜そうとしたが手掛かりが少なく見つからない。

髪が黒く眼も黒く肌の色が少し違うと言った。

該当する奴はいないだろ。

空斗「竜夜はもしかしたら転生者かも知れない」

高也「何故そう思う。」

蒼助「本編にいなかったから？」

空斗「ああ。」

高也「それだけか」

空斗「……後なのはが言った特徴が一緒だから」

あいつの髪は黒く、眼も黒く、肌も少し違う。特徴一緒だな。

高也「よし。殺しにいこう」

蒼助「止めろ！！」

空斗「明日は俺達とフェイト達は管理局だからってなんかするなよ」

高也「……」

そういって昨日は別れた。

そうして今日は、俺一人で来た後、俺は火紫の下駄箱に奴への手紙を入れ、俺は屋上に来た。空斗や蒼助は何もするなと言ったが俺は無理だ。あいつらはフェイトやはやてに好かれているから俺の気持ちはわからない。まあ、空斗は少し違うが・・・

俺はどうしてもなのはを振り向かせたい。

どんな事をしてでも。

ガチャ

来たようだな

高也「遅かったな」

高也ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

竜夜ｓｉｄｅ

勘弁してくれ。

帰って寝ようとしたら下駄箱に手紙が入っていてラブレターかと思ったら果たし状？見たいのが入っているとか何なんだよ本当に。

それでキラに言われて屋上に来たらなんで高也がいるんだよ！！

竜夜「はぁー。何の用だ、高也」

高也「お前に聞きたい事がある」

竜夜「何だ？」

高也「お前小さい頃泣いているのはに公園であったろ」

竜夜「ああ」

ってしまったーー！！隠していたのに自爆したーー！！

高也「やっぱりかフフフ」

壊れた？

高也「貴様さえいなければなのはは、なのははーーー！！」

と魔力弾をぶつけて来た。

竜夜「何のまねだ！！」

高也「貴様がなのはにフラグを立てなかったら俺が、俺が！！」

ってか質問の答えになってねーし。しかも、なのはにの後が魔力弾で聞こえねーよ。

キラ『やっぱりフラグ立ていたんだ』

竜夜『どうゆう意味だよキラ！！』

キラ『気にしないで。それより避けるのに集中して！！』

竜夜『ああもう！！わかってる』

三分ほど避けていたら突然魔力弾が途絶えた。そして、

高也「やっぱりか」

竜夜「何がだ」

高也「お前転生者だろ」

竜夜「俺は……」

高也「言い訳するなよ。俺の魔力弾を三分も掠りもしないのは転生者ぐらいだ」

こいつ意外に考えてる

竜夜「……だったら」

高也「デバイスを構えろ」

竜夜「何故だ」

高也「お前を叩き潰してやる。二度なのはの前に現れられないぐらい」

竜夜「……断る」

原作に関わりたくない。それは俺の本心だ。だけど誰かにそれを強制されたくはない。

高也「なら……死ね」

そう言った瞬間何処からか銃を取り出し撃ってきた。

竜夜「しまった！！」

避けれたが屋上から俺は落ちた。

キラ『竜夜！！』

竜夜『……いくぞキラ！！』

キラ『うん！！』

竜夜「フリーダムセットアップ。モードセイバー！！」

と叫んだ瞬間俺は体にセイバーモードのバリアジャケットが展開され右手にビームライフルを装備して地面に着地した。

キラ『リミッターはどうする？』

竜夜『魔力はＡＡ＋まで、後は全部解除。』

キラ『了解！！』

そう言われたら体が軽くなったきがした。

高也「やはり転生者か」

竜夜「……何故こんなことを」

高也「決まっている。なのはを俺の物にするためだ」

竜夜「どうゆう意味だ」

高也「そのままの意味だよ。なのはの傍に誰もいなければなのはは俺の物になる。お前さえいなければ！！」

竜夜「……」

キラ「……」

高也「このアニメの世界でなのはをそして「ふざけるな！！」なに？」

竜夜「何がなのはを自分の物にするだ。誰もなのはに近づかなかったら自分の物にできるだ。ふざけるな！！あいつを物扱いするな！！それにアニメの世界だとふざけるな！！この世界は確かに魔法少女リリカルなのはに似ているかもしれない。だけどそこまでなんだよ。この世界はこの世界だ！！アニメとは違う！！」

高也「黙れ、黙れ黙れーーー！！」

竜夜「お前がこの世界をアニメの世界と見なすなら、お前が人の意思を無視して自分勝手に意思を曲げようとするなら、俺はお前を破壊する！！キラ！！」

キラ「うん！！さすがに今回は僕も頭にきてるからね。行くよ竜夜！！」

竜夜「ああ！！火紫竜夜、目標を破壊する！！」

高也「死ね、死ね死ね死ね死ね死ね死ねーーー！！」
と銃を乱射してくるが動きが正直単調すぎる
竜夜「その程度！！」
簡単に避けれる。
竜夜『キラ。あいつの能力を解析できるか？』
と念話でキラに聞く。
キラ『三分稼げる？』
竜夜『余裕だ！！』
そう言いながら俺は弾を避けながらビームライフルで反撃するが盾が堅すぎる。
高也「これでどうだーー！！」
とさらに銃を増やして撃ってくる。
だが避けれ無くは無い。だけどそれで油断した。
高也「バカが！！」
と避けた弾が曲がってこちらに向かって来た。
避けれ無い。今のままなら。

竜夜「ＳＥＥＤ発動」

そう言った瞬間頭の中で種が割れたような気がした。

高也「馬鹿な！！」

そう、俺のＳＥＥＤは身体能力や魔力、などを引き上げる。限界さえも越える。そして空間認識がつく。これは空間に有る奴の場所がわかる。だから見えない、位地にある物も分かる。スーパーコーディネーターを重ねたら殆どチートな気がする。

キラ『竜夜、わかったよ！！』

竜夜『何なんだ？』

キラ『彼の能力は無限の銃聖』

竜夜『無限の銃聖？』

キラ『そうだよ。エミヤシロウの能力である無限の剣聖の銃のバージョン』

竜夜『それなら剣聖の方がよくないか？』

キラ『ううん。どちらかと言うとこっちの方が立ち悪いかも』

竜夜『なんでだ？』

キラ『彼の無限の銃聖は銃器類ならなんでもいいんだよ。それに』

竜夜『それに？』

キラ『竜夜来るよ！！』

竜夜「これは、固有結界！！」

といつの間にか周りが固有結界で囲まれていた。

高也「死ねーー！！」

と辺りに銃が浮いていた。

キラ『使うしか無いよ！！』

竜夜『わかってる』

と全ての銃の引きがねが引かれた瞬間

「「クロックアップ！！」」

をした。

竜夜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

高也ｓｉｄｅ

奴がいた場所には何もない。たとえ生きていたとしてもただではすんでいいいはず。

高也「倒したぞ。奴をフフフハハハ「何勘違いしてやがる」何！！」と声のした方を向いて見るとそこには無傷の竜夜がいた

竜夜「終わりだ。風の傷！！」

と何故奴が無傷なのかは奴の斬撃によって解らなくなった。

高也ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

竜夜ｓｉｄｅ

竜夜「危なかった」

キラ「ってか最初から魔力のリミッター全部外して、エクスカリバーを使えばよかったんじゃないの？もしくはフリーダムモードかエクシアモードでも」

竜夜「相手がどんな能力か解らないのに使えないだろ」

キラ「まあそうだね」

竜夜「それよりも校舎どうしよう」

さっきの戦いの性で校舎がかなり壊れている

キラ「大丈夫。彼が結界を張っていたから。もうすぐ壊れると思うよ」

竜夜「そうか。よし高也も回復させられたから帰えるか！！」

と帰えろうとしたら

キラ「ねぇ竜夜」

竜夜「なんだキラ」

キラ「管理局が来るのを覚悟して置いた方がいいよ」

竜夜「わかってるよ」

そして俺達は帰った。

もう戻れない。

力を使ってしまったから。

第五話　久しぶりの力の解放！！　貴様を破壊する！！（後書き）

竜夜「疲れたーー」

よく魔力にリミッターを付けてあれだけ戦えたな

キラ「まあ、一応修業は終わらせてるからね」

竜夜「本当だよ」

キラ「でもバトルマニアのシグナムとかは大変だよ」

フフフ今からどうなるか楽しみだ

竜夜「お手柔らかにお願いします！！」←土下座

いやだね！！

竜夜「鬼ーーー！！」

キラ「しばらくは更新できません」

アンケート、感想待っています

キラ「次回は、前編、後編の二つか中編を入れた三つです」

次の戦闘からガンダム登場です。お楽しみに！！

第六話　友との会合（前書き）

私は帰って来た！！

すいません言ってみたかっただけです。

書き溜め出来たので投稿します

８人の方が感想を書いてくれましたありがとうございます！！

今回は空牙刹那さんが提案してくれたオリキャラがでます　少し性格が違うかもしれませんが許してください。

アンケートは１１話を投稿するまでです

それではどうぞ！！

第六話　友との会合

高也との戦いから二日たった。

だけど今だに管理局は来ない。多分報告をしなかったんだと俺とキラは思う。

そして、なぜかあの戦いの後から高也が学校に来ていない。最初は管理局の仕事かと思ったがさすがに三日も経つとそれは無いと思う。それにさりげなく空斗とかに高也の事を聞いたが知らないようだった。けど、何か胡散臭い

竜夜『キラ』

キラ『何、竜夜？』

竜夜『今から言う事を管理局のサーバーにハッキングできるか？』

キラ『とりあえず言ってみて』

竜夜『……だ』

キラ『出来なく無いけどどうして？』

竜夜『嫌な予感がする』

キラ『わかった』

アリサ「竜夜聞いてるの！！」

今、俺達のクラスは学園祭の話し合をしている。

竜夜「アア、キイテルヨ」

なのは「竜夜君、絶対聞いてないよね」

蒼助「竜夜は相変わらずだね」

アリサ「全く。それでなんか案あるひと」

がまったく誰もいなかった。

竜夜「てかさ何故二ヶ月も先の事を今決めるんだよ」

なのは「？・・あはは」

空斗「確かにな」

クラス全員が肯定した

アリサ「しょうが無いでしょう。先生が早めに決めなさい、て言ったんだから」

そんな事を話していたら

キンコンーカンコンー

チャイムがなった

アリサ「……来週までに全員何か考えるように！！」

そして先生が帰りの挨拶をして俺は校門に先周りしてある奴を待った。

キラ『竜夜、何で彼を待つの？』

竜夜『ちょっと話したい事があるんだ』

キラ『それってさっき僕に頼んだやつの結果？』

竜夜『ああ』

？「お前が誰かを待っているなんて珍しいな」

来たか

竜夜「お前を待っていたんだよソーマ」

ソーマ「俺に何か用か？」

竜夜「ああ。下手したらかなりやばい用事だ」

ソーマ「……家に来るか？」

竜夜「できたら頼む」

ソーマ「わかった」

そう言って俺はソーマの家に向かった。

天宮宗真　まあ俺達はソーマと呼んでいるが。俺と同じ転生者だ。

出会ったのは四歳の時まだ俺が修業していて偶然次元世界に行った時だ。　まあ、死ぬかと思ったが。だってこいつ、いきなり襲って来たから。

ソーマ「どうかしたのか？」

いつの間にかソーマの家についたみたいだ。

竜夜「……お前と会った時の事を思い出してた」

ソーマ「ああ。あれか。今さらなにを」

竜夜「……それで俺に会った時［お前の覚悟を見せろ！！］とか言って来ていきなり攻撃してきたのは誰だよ。お前はガンダムWのナタクのパイロットかよ」

ソーマ「……いや、まあ、しょうが無いだろ。あの時お前に会う前に腐った転生者を倒した後ですぐにお前が来たからてっきり敵の仲間かと思ったんだよ」

竜夜「はぁー。それよりも久しぶりだなスウェン」

キラ「久しぶりスウェン君」

スウェン「ああ。久しぶりだな竜夜、キラ」

こいつはスウェン。ソーマの相棒でスターゲイザーで出たストライクの完成形態のノワールのパイロットだ。

その後俺達はリビングに入り椅子に座って話し始めた。ちなみにソーマは片目のコンタクトを外してる。あいつはオッドアイだけど普

段はそれを隠している。

ソーマ「それでどうしたんだ？」

竜夜「なのは達と知り合った」

ソーマ「……お前介入したくないんじゃなかったのか」

竜夜「……席替えで魔王が隣になった」

ソーマ「……成る程な」

竜夜「まあそんなところでな」

その後俺は高也と戦った事をキラが保存してあった映像を見せながら説明した。

ソーマ「……くずだな」

コイツキレやがった　まあしょうが無いか

スウェン「それよりもそいつは今学校にきてるのか？」

竜夜「いいや、行方不明だ」

ソーマ「ミッドでもか？」

竜夜「キラにハッキングして確かめてもらった」

ソーマ「一体なにが起きたんだ？」

竜夜「それだけじゃない」

スウェン「どうゆう事だ？」

キラ「実は……最近ミッドや次元世界で行方不明者がたくさん発生してるんだ」

竜夜「しかもそいつらは管理局に恨みを持ったり魔道士ランクが高い奴やそして……」

ソーマ「そして？」

竜夜「転生者達が行方不明になっている見たいだ」

ソーマ「なっ！！」

スウェン「確かなのか！」

キラ「ううん。転生者は僕と竜夜の予想。だけど特殊な能力があって身体能力が高い人は大半がその可能性は高いと思うよ」

ソーマ「まったく一体全体なにが起きているんだ」

竜夜「わからない。だけど、かなり、やばい気がしてならないんだよな」

ソーマ「確かにな、俺はしばらく、介入の準備をするがお前はどうする？」

竜夜「俺は……」

ソーマ「まあ、お前のやりたい用にやればいいさ。俺はお前の覚悟を知っているからな」

竜夜「だからなーあれは」

ソーマ「だけど後悔だけはするなよ」

竜夜「わかってるよ。それじゃあ帰るよ」

ソーマ「気をつけろよ」

竜夜「お前もな」

そう言って俺はソーマの家から帰った

第六話　友との会合（後書き）

後一日だ！！

竜夜「何が？」

００映画公開日まで！！

キラ「確か初日に見に行くんだっけ？」

そうだよ

竜夜「映画に浮かれても勉強はしろよ」

……はい

キラ「ははは？次回舞い上がる蒼天の自由の剣　お楽しみに！！」

感想、アンケート待っています！！

第七話　舞い上がる蒼天の自由の剣　前編（前書き）

遂に００映画公開日！！

竜夜「テンション高！！」

キラ「？はははは」

今回少しだけガンダムがでます！！

竜夜「ではどうぞ！！」

第七話　舞い上がる蒼天の自由の剣　前編

今週も後、二日で学校が終わる

そんなことを考えていたら

キラ『ねぇ、竜夜』

竜夜『どうかしたのかキラ？』

キラ『なのはちゃんがこっち向いてＳＯＳな事見たいに見てるよ』

はぁーまたか。

またかと言うのもあの一件以来、授業で分からないとこが有ると何かと聞いてくる

断ると、

なのは「ねぇ竜夜君、此処が分からないんだけど」

竜夜「自分で考えろ」

なのは「…うっうっ」

と半泣きして周りが教えてやれよとか言ってくる始末。しかも自覚が無いからさらにたちが悪い。それで結局教えている。

竜夜「何だ高町」

なのは「此処がわからないんだけど」
竜夜「そこは……だ」
なのは「あっそうか」

はぁーコイツは。しかも空斗や蒼助は管理局か？フェイトやはやてもかよ

なのは「……竜夜君」
竜夜「何だ」
なのは「ありがとう！！」
竜夜「……別に」
キラ『竜夜もどういたしましてくらい言ったら？』
竜夜『何でだよ』
キラ『いや、何でって？』
そんなやり取りをして昼を食べ５時間目になったら
なのは「！！」
先生「どうかしたのか高町」
なのは「先生用事を思い出したので帰ります！！」

そういってなのはは教室を出て行った。

キラ『竜夜気づいた？』

竜夜『当たり前だろ』

キラ『行かなくていいの？』

竜夜『行く理由がない』

キラ『原作に無い展開だよ』

竜夜『それとこれは違うだろ』

キラ『昨日調べた事に関係あるかもよ』

竜夜『あいつなら大丈夫だよ空斗達もいる』

キラ『彼らはミッドだよ』

竜夜『……』

キラ『ねぇ竜夜』

竜夜『何だ』

キラ『竜夜がいた世界では僕達の事がアニメになっていたんだよね』

竜夜『ああ』

キラ『なら知っているよね。僕がどんな事をしてしまったか』

竜夜『……』

キラ『あの時ラウ・ル・クルーゼは僕に言ったよ。［正義と信じ、わからぬと逃げ！！知らず！聞かず！！その果ての終局だ！もはや止める術などないッ
そして滅ぶ！！人は！！滅ぶべくしてな！！］と自分達の事を正義と信じ疑わかった人達、自分には関係無いと逃げ知ろうとぜず聞きもしなかった人達。そのどちらも悪いと』

竜夜『……』

キラ『そして僕は彼を殺してしまった。怒りに憎しみに任せて』

竜夜『……』

キラ『僕は後悔したよ。何故彼を殺してしまったのか、どうして、世界がこうなる前に止められなかったのか。僕は竜夜には僕と同じ過ちを繰り返して欲しく無いんだ』

竜夜『わかったよ』

キラ『竜夜』

竜夜『見に行くだけだからな。何もなかったら絶対に帰るからな』

キラ『うん。それでいいよ』

そして行こうとしたら、
先生「なんだ火紫、お前も用事か？」

竜夜「いえ、ビデオがちゃんと撮れているか気になるので帰ります」

先生「いやダメだろっておい！！」

先生が何かを言っているが知らんが無視して俺はなのはの所に向かった

竜夜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

なのはｓｉｄｅ

私は学校の授業をしていてとても大きな魔力を感じたので学校を抜けだして来ました

なのは「貴方は何ものですか」

？「……」

そこにはとても大きい、黒いロボットがいました

なのは「レイジングハートさっきの魔力は」

レイ「間違い無くこのロボットからです」

？「お前は高町なのはか？」

なのは「そうだよ」

？「そうかなら死ね！！」

と背中から砲撃を出して来たの

なのは「！！レイジングハート」

レイ「了解です。マスター」

なのは「ディバインバスター！！」

レイ「ディバインバスター」

でも何かに弾かれてしまいました

なのは「うそ！！」

そしてそれに油断してあのロボットから出て来た何かの砲撃に当たってしまいました

なのは「きゃ！！」

その後すぐにまたあのロボットの背中から出た砲撃に当たってしまいました

その後私は空から落ちました

レイ「マスター！！」

体中痛くて血が出ていた私にはロボットが私に砲撃をしようとしているのがわかりました

なのは「ごめんねフェイトちゃん、はやてちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん、空斗君、蒼助君、高也君、」

もう一度会いたかったな。あの時私を助けてくれた人に。

砲撃が当たる瞬間

？「アヴァロン」

と声がしました。

？「生きているか？」

そしてそこには私の席が隣で頭がよくて優しい火紫竜夜君がいました。

なのはｓｉｄｅ　ｏｕｔ

竜夜ｓｉｄｅ

俺は学校を抜けた後クロックアップをしてなのはの元へ向かった

そこには、

竜夜「キラあれって」

キラ「うん。デストロイだね」

竜夜「何であれが」
そうそこにはモビルアーマー形態のデストロイがいた
キラ「竜夜あれ！！」
と言われ見たらそこには血まみれで倒れてるなのはがいた。
竜夜「やばい！！」
しかも砲撃をデストロイは放とうとしてる
俺はなのはの前に立ち
竜夜「アヴァロン」
そして
竜夜「生きているか？」
と声をかけた。
なのは「な…んで、…竜……夜……君……が」
竜夜「黙ってろ」
此処だと治療が出来ないな。今の状態でなのはが大丈夫か解らないがやるしかないか
竜夜「クロックアップ」
と俺はなのはを抱いて移動した。

少し遠くに来たあたりで俺はクロックアップを解除した。
なのは「……フェ…イト……ちゃん達に伝えて」
竜夜「寝言は寝てから言え」
なのは「だっ……てこの……傷…じゃ」
竜夜「黙ってろ。アヴァロン！！」
俺はアヴァロンを使い傷を治した
なのは「うそ、って竜夜君魔道士だったの！！」
竜夜「たっく黙ってろ」
はぁーばれたか。面倒だな
竜夜「さてと、行くか」
なのは「えっ。何処に？」
竜夜「あのデス…ロボットの所」
なのは「無謀だよ！！」
竜夜「……俺はお前とは違う」
なのは「えっ」
竜夜「此処でじっとしてろよ」
なのは「で、でも」

竜夜「はぁー。安心しろ。俺は死なない。」

なのは「だ、だけど」

竜夜「安心しろ。絶対守ってやる」

なのは「えっ。」

ああもう何言っているんだよ俺！！

キラ『やっぱり竜夜は優しいね』

竜夜『……行くぞ。キラ』

キラ『うん！！』

竜夜「モードチェンジフリーダムモード！！」

そしてフリーダムガンダムになった俺はデストロイの所に飛んだ

第七話　舞い上がる蒼天の自由の剣　前編（後書き）

竜夜「なあ何でデストロイ？」

他のも考えたんだけどやっぱりフリーダムで巨大な奴と戦うだったらデストロイかなと思って

キラ「そうなんだ」

竜夜「次回舞い上がる蒼天の自由の剣中編」

キラ「お楽しみに！！」

感想、アンケート待ってまーす！！

第八話　舞い上がる蒼天の自由の剣　中編（前書き）

ごめんなさい短いです。

竜夜「バカが！！」

キラ「竜夜抑えて」

ちなみに少し訂正です。感想でデストロイの大きさを聞かれ１８メートルと答えましたが３メートルの間違いです。

本当にごめんなさい

それではどうぞ！！

第八話　舞い上がる蒼天の自由の剣　中編

なのはｓｉｄｅ

私は驚きました。

わたしがロボットに倒されそうな時に助けてくれたのが席が隣の竜夜君でした。
助けてくれた事を御礼を言う前にフェイトちゃん達に何か言葉を残そうとしたら傷を治してくれました。死にかけていたのに一瞬で治して驚いて竜夜君が何故魔道士かを聞こうとしたらあのロボットの所に向かうといいだしましたの。もちろん止めようとしたけど無理矢理押し切られたの。
その時何故か懐かしい感じがしたのは何でだろ？
そして竜夜君はバリアジャケット？を展開してあのロボットの所に向かったの

なのはｓｉｄｅ　ｏｕｔ

竜夜ｓｉｄｅ

竜夜『キラ、フリーダムモードだけどデストロイには勝てるのか？』
キラ『……僕が前に戦った時は偶然倒せたからね。それにあれは多分僕が戦った時より強いと思うよ』
竜夜『ちなみにデストロイには誰か乗っているのか？』

キラ『ううん。一応魔力は感じるけど生命反応はしないから多分人は乗っていないよ』

竜夜『わかった』

正直安心した。人が乗っているかどうかで戦い方が変わるからな。と話している間にデストロイの所についた。

デストロイ「フリーダム……貴様も転生者か」

竜夜『キラどうゆう事だ？』

キラ『多分遠くから魔力を通じて操作しているからこちらも見えているのかも』

竜夜『成る程な』

竜夜「だとしたら？」

デストロイ「ははは！！まさか未来のエース・オブ・エースを実験がてら倒しにきたら転生者が来るとはな。しかも俺達がまだ知らない転生者と来た。笑いが止まらない！！」

竜夜『キラ会話を録音してあるか？』

キラ『うん大丈夫だよ』

デストロイ「おいお前」

竜夜「何だ」

デストロイ「俺達の仲間にならないか」

竜夜「その前にお前は何物だ」

デストロイ「俺か？俺達はなレクイエムだよ」

竜夜「レクイエムだと？」

デストロイ「そう。管理局に恨みを持つ奴や転生者、高ランク魔道士のあつまりだよ」

竜夜「まさか最近ミッドで続く失踪事件は」

デストロイ「ああ、あれか、確かに俺達だよ」

竜夜「そのなかには管理局の事を憎んでいないやつも……まさか！！」

デストロイ「その通りだよ。洗脳して無理矢理戦わせるためだよ」

竜夜「……」

デストロイ「なあお前何故俺達は定められた通りに行動しなければいけない？何故奴らに良いところを渡さなければ為らない！！だったら俺達がなればいい。俺達は力がある。だから俺達が全てを支配すればいい。そのためには管理局そして、なのは、フェイト、はやては邪魔だだから俺達は殺す。奴らをそして、管理局を！！」

竜夜「……確かに俺は管理局は大嫌いだ」

デストロイ「なら」

竜夜「だけどなお前達の仲間になるつもりは無い！！」

デストロイ「何だと」

竜夜「管理局は間違ってる。だけどな何故それが誰かを殺す事につながる？お前はただ力をただ振るいたいだけだろ！！お前は誰かの事考えて戦った事があるのか？自分を否定されても自分の考えを貫く覚悟があるのかよ。それすら出来ないような奴が偉そうな事言うんじゃねぇ！！」

デストロイ「どうやらお前は邪魔な存在らしいな」

竜夜『キラ！！』

キラ『うん何時でも行けるよ』

竜夜「フリーダムガンダム、火紫竜夜、目標を破壊する！！」

今自由と破壊がぶつかり合う

第八話　舞い上がる蒼天の自由の剣　中編（後書き）

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい。

キラ「竜夜何したの」

竜夜「……俺じゃない」

キラ「じゃあ誰「魔」成る程ね」

竜夜「そういえば作者００映画どうだった？」

ごめんな、えっ、ああものすごくおもしろかった。是非皆さんも見に行ってください。

キラ「そうなんだ」

竜夜「切替て、次回、舞い上がる蒼天の自由の剣後編、お楽しみに！！」

感想、アンケートお待ちにしています！！

第九話　舞い上がる蒼天の自由の剣　後編（前書き）

すいませんでしたーーーー！！

かなり更新が遅れました。

じつは更新使用として間違えて削除してしまいまして

他にも学校の成績がやばく携帯を全然使わせてくれなくて中々更新できませんでした。

楽しみにしていたかたがには本当に済みません。

それと受験があるので受験が終わるまで中々更新できそうにありません。本当にごめんなさい。

それでは第九話　蒼天の自由の剣　後編　どうぞ！！

第九話　舞い上がる蒼天の自由の剣　後編

あの後デストロイはＭＡからＭＳに変形した

竜夜「くそ！！」

相手の攻撃は当たらないがこちらの攻撃は全てビームシールドに防がれる。

デストロイ「ならば！！」

と手を分離して攻撃してきた。

竜夜「ちっ！！ドラグーンか！！」

キラはビームシールドを発生源を探してるから自力で避けるしかない。

ビームライフルで反撃するが手にもビームシールドが付いているから弾かれる

竜夜「！！ＳＥＥＤ発動」

頭の中で種が割れるような音の後、ドラグーンの位地やビームが来る位地が分かる。

ドラグーンからビームが出た瞬間、ビームシールドの死角からビームサーベルで斬った。

デストロイ「なに！！」
そして再びドラグーンがビームを出した瞬間ビームライフルでビームシールドの死角から撃った。
デストロイ「ちっ！！」
そう言いながら顔と胸から合わせて四つのスキャラを出して来たがフリーダムの機動性にまかせて避けた。
竜夜「これで！！」
とスキャラを避けたと同時にフルバーストを放ったがビームシールドに防がれた。
竜夜「オートのビームシールドか！！」
キラ『竜夜！！』
竜夜『キラ、わかったのか？』
キラ『うん。ビームシールドのエネルギー源はコックピットの位地で遠距離から魔力を送ってる見たい。ビームシールドの発生装置は体中にあるから一つを破壊しても意味が無いよ』
竜夜『ならどうしｔ『竜夜君！！』何だ高町！！』
なのは『私も何か手伝う！！』
竜夜『今のお前はもう魔力が……高町』
なのは『えっなに？』

竜夜『スターライトブレイカーは何発いける？』

なのは『えっ、え～と一発が限界かな。レイジングハートも少しまずいからって、何で竜夜君がスターライトブレイカーを知ってるの！！』

竜夜『細かい事は気にするな。打てるなら今から打つ準備をしてくれ、合図をしたら打て！！』

なのは『わ、わかったの』

となのはとの念話を切った。

竜夜『キラ、スターライトブレイカーでビームシールドを破壊できるか？』

キラ『無理だね』

竜夜『ならビームシールドがなかったらどうだ？』

キラ『多分あれもフェイズシフト装甲だけどあの悪魔の砲撃って言われてるスターライトブレイカーなら多分破壊出来ると思うよ』

竜夜『ＧＮ武装ならどうだ？』

キラ『いけるだろうけどエクシアは今改造して００にしようとしてる途中だから無理だよ』

竜夜『ＧＮブレイドだけ出せないか？』

キラ『それなら一本だけなら』

竜夜『なら頼む。その一本でビームシールドを切り裂いて懐に飛び込む！！』

キラ『わかった！！』

と同時にビームライフルを握ってない左手にＧＮブレイドを握った。

フリーダムの機動性に任せて相手の近くまで接近したらビームシールドがはられたがＧＮブレイドで切り裂いた。

デス「何！！」

と言いながらスキャラを放とうとしてる内に切り裂いたビームシールドの穴から俺はデストロイの懐に飛び込んでコックピットのあるはずの部分にビームライフルを閉まって握ったビームサーベルを突き刺した。

その瞬間周りを包んでいたビームシールドが消えた。

竜夜「よし！！」

なのは『竜夜君！！』

竜夜『打てなのは！！』

と言いながら全速力でデストロイから離れた。

次の瞬間デストロイにスターライトブレイカーが放たれた。

竜夜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

なのはｓｉｄｅ

なのは「スターライトブレイカーー！！」

竜夜君の合図とともに私はロボットにスターライトブレイカーを放った。だけど

なのは「嘘！！」

煙りから見えたのは所々壊れてはいるがまだ原形を保っているロボットでした。

デス「万策つきた用だならば今度はｋ「まだこっちのターン何だよ！！」何！！」と横から五本の砲撃がロボットを貫いた。

なのはｓｉｄｅ　ｏｕｔ

竜夜ｓｉｄｅ

煙りから出て来たのはまだ原形を留めているデストロイがいた。

ちっまだやられないか

竜夜『キラ』

キラ『何？』

竜夜『フルバーストなら？』

キラ『今の状態のデストロイなら』

竜夜『よし』

デス「万策つきた用だならば今度はｋ「まだこっちのターン何だよ！！」何！！」

竜夜「ハイマットフルバースト！！」

そして両肩のパラエナと腰のレール砲と右手のビームライフルから砲撃を出した。

そして、

デス「ぐわっ」

そして今度こそデストロイは倒れて爆発した。

竜夜『終わったな』

キラ『うん』

竜夜『……レクイエムか』

キラ『とんでもない事になったね』

竜夜『そうだな……ん』

キラ『来たみたいだね。どうする？』

竜夜『とりあえず帰ろ、疲れた』

キラ『そうだね。』

そういって俺とキラは転移して帰った。

竜夜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

なのはｓｉｄｅ

竜夜君が放った砲撃を喰らったロボットは倒れて爆発してしまいました。

私は竜夜君に聞きたい事があって聞こうとしたら、

フェイト「なのは！！」

なのは「フェイトちゃん！！」

はやて「無事やった……って血まみれやないかい！！」

蒼助「大丈夫？」

なのは「うん見た目は酷いけど怪我はないよ！」

空斗「……なのは、お前回復魔法使えたっけ？」

なのは「ううん。竜夜君が治してくれたんだよ」

フェイト「えっ竜夜って」

はやて「学校でなのはちゃんの隣の席の？」

なのは「うん。ほらあそこに……あれ？」

フェイトちゃん達が来るまでは確かにいたはずなのに

空斗「……」

なのはｓｉｄｅ　ｏｕｔ

自由の翼は再び剣を手にし戦う。

第九話　舞い上がる蒼天の自由の剣　後編（後書き）

久しぶりの更新

竜夜「全くだ」

キラ「それにしてもまさか間違えて削除するなんて」

竜夜「ダメ作者が」

……うるせー

キラ「？ははは。それにしても空牙刹那さん心配してメッセージをくれてありがとうございます」

正直かなり嬉しかったです！！

竜夜「アンケートの方もたくさんの方が出してくれて本当にありがとうございます」

キラ「閉め切りはまだ先ですからアンケートお願いします」

さて次回予告です。

デストロイを破壊に成功して帰った竜夜とキラしかし、その戦いを見たものは……次回魔法少女リリカルなのは　最強なのに介入したくない転生者　第十話　それぞれの思惑

次回もお楽しみに

キラ「感想、アンケートお待ちしています」

竜夜「次回俺出番なくね？」

第十話　それぞれの思惑（前書き）

お久しぶりです。

前回感想二軒しか来なかった（泣）

感想って結構励みになるんですよね。

アンケートですが今回で最終会です。
１１話を更新したら締め切りです。ちなみに更新日は後書きにて。
後今回アンケートでもらったキャラが何人かでます

最後に感想できたら書いてくださいお願いします。

それでは十話　それぞれの思惑、どうぞ

第十話　それぞれの思惑

リンディｓｉｄｅ

私は今なのはさんにあった事を聞いてレイジングハートに記録されていた映像をシグナムさん達と見ている。

リンディー「それにしてもこれは……」

シグナム「何なのだあの黒い巨大なロボットは」

エイミー「一応調べましたけど管理局にあるデータにあんなロボットはいません」

クロノ「狙いはなのは達……それにしても彼は一体何物なんだ」

そう私達はなのはさんを襲ったロボットよりもなのはさんを助けた子に注目している。

エイミー「魔力ランクはＡＡぐらい何だけど……」

魔力ランクは別にそこまで気にしてはいない。だが姿、そして動きがありえないのだ。

クロノ「あの黒いロボットに似た姿、そして空中でのあの動き……」

そう彼は空中でまるで空気抵抗が無いような動きをした。さらに、シグナム「高町のあの砲撃で倒れなかったあれを一撃で倒した……ただ者ではないな」

リンディ「確か竜夜君と言ったかしら」

確か名前は火紫竜夜なのはさん達と一緒の学校に通っている同い年の男の子

リンディ「どうにか管理局に入ってくれないかしら？」

ともかく明日なのはさん達が学校に行ったら連れて来てくれるらしい。その時に交渉ね

リンディ「それにしても火紫何処かで聞いたような名前ね」

とその呟きには誰も気が付かなかった。

リンディーｓｉｄｅ　ｏｕｔ

？？？ｓｉｄｅ

？１「それにしてもまさかデストロイが破壊されるなんてね」

？２「全くだ高町なのはは倒せないし何も収穫がなかったではないか」

？3「いやいや、一つだけ収穫があります」

？2「ほう、何だ」

？3「高也が言っていた彼の力がわかったではありませんか」

？4「確かに彼の力はまだ分からないからななあー高也」

高也「けっ。奴を殺すのは俺だ。他の奴には渡さねぇ」

と言って高也は会議室から出て行った。

？1「他に報告は？」

？3「管理局に潜入しているSから一つ」

？1「なんだい」

？3「はい何でも管理局で我らの事を探っているやからがいるらしくそれが近々アースラに配属されるらしくその情報をアースラに渡し三大提督に渡すそうです」

？1「それは誰だい？」

？3「ティーダ・ランスターです」

？1「処分は君達に任せていいかい？」

？「「「はっ」」」

？1「それにしても」

？3「どうかされましたか？」

？1「いや何でもないよ」

そう言って僕は会議室から出ていった。

？5「それにしても君は言をうとしたんだい？」

会議室から出てしばらくしてこの世界の相棒が話しかけて来た。

？1「なあに、人間は愚かだと言おうとしただけだよラウ」

ラウ「ふむ、確かになリボンズ」

リボンズ「それにしてもラウ」

ラウ「なんだいリボンズ」

リボンズ「あのガンダムをどう思う？」

ラウ「決まっているあのガンダムのデバイスは間違いなく彼だよ」

リボンズ「ふふ、楽しみかい」

ラウ「当たり前だよもう一度彼に地獄を見せられるのだから」

リボンズ「ふふ、やはり君と僕は相性がいいらいしいね、ラウ・ル・クルーゼ」

ラウ「確かにな、リボンズ・アルマーク」

楽しみだよ火紫竜夜、君に会うのがリボンズｓｉｄｅ　ｏｕｔ

？？？　ｓｉｄｅ

？「勇斗！！」

勇斗「どうしたクルス」

クルス「さっきアースラから来た情報でなのはが襲われたらしい」

勇斗「それで？」

クルス「襲った奴の画像がさっき届いてそいつが……」

勇斗「なっデストロイ！！」

クルス「で、それで助けたのが……」

勇斗「フリーダム……竜夜か！！」

クルス「どう思う？」

勇斗「……アスランお前は？」

と相棒のアスランに聞いた。

アスラン「多分だがデストロイは奴らが動き出したんだと思う。フリーダムは多分竜夜とキラが事態を察して向かったんだと思う」

クルス「まあ十中八九キラが竜夜を説得したんだろうけど」

？「確かにな」

とクルスの相棒であるヒィロが言った。

と二人で話していたら

？「勇斗、クルス」

勇斗「どうした零牙」

と俺達が所属している部隊の隊長である不知火　零牙が話しかけて来た。

零牙「すまないが三大提督が呼んでいる全員集合だそうだ」

クルス「全員は珍しいね」

零牙「ああ、だから俺も驚いている」

と本当に驚いている見たいだった。

そして向かった先で久しぶりに会う奴がいたから話しかけた

勇斗「久しぶりだな零」

零「へっ久しぶりだな勇斗、クルス」

？「あぎゃあぎゃ久しぶりだなアスラン、ヒィロ」

アスラン「相変わらず見たいだなフォン」

クルス「久しぶり零」

ヒィロ「……」

零「それよりもおもしろい事になってる見たいだぜ」

勇斗「なにがだ？」

零「デストロイの事だよ。まあ今回はその事で集合かかったんだろうけどな」

と、零と話していたら

ミゼット「全員そろった見たいね」

と三大提督が来た。

どうやら零と話している間にメンバーがそろっていたみたいだ。

俺やクルス、零牙、零他にもアルマ、夕凪、朱雀、がいる。

と、会議が始まった。

ミゼット「あなた達に集まってもらったのは他でもありません。数時間前アースラに所属している高町なのはが未確認のロボットに襲われたのは知っていますね」

とデストロイの対策として俺達三大提督直属独立組織ソレスタルビーングがアースラに行く事になった。
そして、フリーダムに付いての説明があった。使っている竜夜の事味方かは分からない事、まあ、あいつは管理局を嫌ってるからよっぽどの事がない限り協力しないだろうけどな。と説明が終わったら零が笑いだした。

零「あぎゃあぎゃ」

零牙「どうしたんだ零？」

零「美しい」

夕凪「はっあ？」

零「彼女のピンチに駆け付け、さらにデストロイを破壊して去る美しい一体どんな奴かきになるぞ」

あちゃー竜夜どんまい

ミゼット「ま、まあそれはともかく明日、８時半にアースラに合流してもらいますいいですか？」

「「「「「「了解」」」」」」

さて地球に行ったら久しぶりに竜夜とソーマに会いに行くかな？

勇斗ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

第十話　それぞれの思惑（後書き）

はぁー疲れた

竜夜「更新遅い！！」

ぐは！！

キラ「？あははは」

ネタがないのでキラ次回予告よろしく

ばたっ

キラ「とうとう力が管理局にばれた竜夜。一体どうする？　次回もお楽しみに」

竜夜「ちなみに次回の更新は十二月三十一日だ」

第十一話　やば死んだかも（前書き）

予告より早く出来たので更新しました。

前回感想をくれた皆様本当にありがとうございます！！

アンケートは現在を持って終了しましたのであしからず

では第十一話をどうぞ！！

第十一話　やば死んだかも

正直学校には行きたくなかった。理由？そんなの決まってるだろ！昨日あんな事あったんだぞ！！（分からない人は八～十話を見てください）絶対になのはとかに捕まって管理局に拉致られるって！！明日からゴールデンウィークなんだから別にいいじゃん！！

キラ「だからって学校さぼっちゃダメだよ、竜夜」

竜夜「違うこれは戦略的ｔ「はいはい、言い訳はいいから」……はぁ～、わかったよ」

そう言って俺は家を出た。だけど俺は知らなかった。この後俺はしばらく家に帰れない事を……

ところ変わって此処は教室

なのは『ねえねえ竜夜君、話しだけでも』

うるせーー！！

朝から念話でなのはがうるさい。話しの内容が管理局に入らない？とか話しだけでもとかうぜー。

朝は朝会でなのはとかと話さなくてよかったけど念話うるせー。

現在４時間目の国語。

今まで一時間目はずっと念話で休み時間になったらフェイト達も一緒に誘って来るし寝た振りしなきゃいけないしうぜー。今日は４時

間だからこの後下校だけどうぜー！！

なのは『ねぇねぇ竜夜君！！』

竜夜『ああもううるせー！！手を挙げたら考えてやるから！！』

と言ったら手を挙げやがった、そんなことしたら……

先生「んっ高町答えられるのか？」

なのは「へっ？えーーー！！」

先生「んっどうしたんだ？」

そういったら前に出るしか無くて前で？マークを出るような感じに前で残りの十分の内、5分考えて出来なくて残りは廊下に立たされていた。残りの十分はキラと念話していた。

何故こうなった？

俺は現在進行形でなのはに引きずられてる。

キラ『自業自得でしょ』

あの後、授業が終わったら魔王化したなのはが廊下から戻って来て準備をして帰ろうとした俺に「お話しようか」と拉致られた。

周りの人間？誰一人恐くてそばに近寄らねぇよ！！

先生だけじゃなくてフェイト達も恐がってるんですけど。

俺生きていられるかなー？と心配になっています。

結果的には生きています。だけど俺は今最悪な状況です。ＯＨＡＮＡＳＩをしない代わりに付いて来てだそうです。
そして、何か適当な道で見られて無いのを確認して転移魔法でアースラに来ました。
ちなみに途中でフェイト達は合流しました。
なのは「こっちだよ」

とアースラを案内されている状況

竜夜「帰りたいんだけ「ＯＨＡＮＡＳＩしたい？」喜んで付いて行きます」

帰ろうとすると魔王化するので不可能
蒼助達も笑ってるがぎごちない。

竜夜『キラ』

キラ『何、竜夜？』

竜夜『念のためアースラにばれない用にハッキングしてコントロール権奪っといて』

キラ『わかったよ』

念には念をね

現在和室見たいな所にいる目の前には甘党の腹黒リンディがいる。
リンディ「始めまして時空管理局所属リンディです、一応話しを聞きたいから来て貰いました」

竜夜「で、何の用ですか？」

リンディ「それよりあなたはお茶は飲めますか？」

竜夜「えっ」

やば死んだかも

なのは「あっそういえば竜夜君甘いの好きなんだよね」

なっ違うぞ！！

リンディ「あらそうなの、それじゃあ」

竜夜「いえ、結構です！！」

と砂糖を入れられる前にお茶を取って飲んだがすでに甘い。

さっきの復讐か、なのは

キラ『この砂糖の量を毎日飲んでいたら普通に糖尿病になってもおかしく無いんだけど？』

キラ冷静に分析してないで助けて

キラ『ごめん無理』

せめて速答しないで欲しい

ふと後ろを見ると、後ろでなのはしてやったりって顔をしていて、はやては笑いを堪えていてフェイトと蒼助は合掌している

リンディ「えっとそれでは管理局について説明します」

と管理局について説明がされた。まあ、ほとんどアニメでやってたのと同じだけど。

てっか聞いてて思ったけど管理局って三権分立無視しすぎだろ

モンテスキューいわく三権を分立させ互いに抑制と均衡の関係でバランスを保ち、権力が一つになるのを防がなければならない。もしも同一のものが三権を行使すれば、全てが失われるだろうと言っていた。

これは真実だと俺は思う。故に勇斗達も頑張っているが中々成果が上がらないらしい。

と腹黒リンディの話しが終わった所で

？「君は話しを聞いているのか！！」

とＫＹが話しかけて来た。

竜夜「なんだＫＹ？」

クロノ「僕はＫＹという名前じゃない！！」

竜夜「知らないのか？ＫＹ＝クロノと書くんだぞ」

クロノ「どんな方程式だ！！」

竜夜「まあＫＹはほっといて「僕はＫＹじゃない！！」それで俺にどうしろというんですかリンディさん」

リンディ「あなたには管理局に入っ「嫌ですので断ります」！！」

速答したらビックリしてるよちなみに後ろでもビックリしてるが蒼助だけは納得してる。なんで？まさかあいつ……

リンディ「なんでかしら？」

竜夜「……」

面倒くさいっていうのもそうだけど一番は

リンディ「理由がないなら「火紫刹那、火紫優美」！！」

竜夜「あなたならこの二人を知っているでしょ？」

リンディ「火紫……まさかあなたはあの二人の」

竜夜「まさかしなくてもその二人の息子ですよ」

リンディ「……」

竜夜「それが俺が管理局に入らず嫌いな理由です」

そういって俺は立ち上がった。

なのは「竜夜君！！」

と俺を引き止めようとしたなのはを無視をして部屋から出た。

竜夜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

フェイトｓｉｄｅ

竜夜が部屋から出て少しして、

フェイト「リンディさん、あの、さっき竜夜が言っていた二人に何が「ごめんなさい」えっ」

リンディ「私の口からは話せないの」

クロノ「母さん！！」

リンディ「……ごめんなさい」

とリンディさんは部屋から出て行った

クロノ「母さん……」

はやて「クロノ君リンディさんが話さないのには何か理由があるや」

蒼助「だから今は……」

クロノ「わかっている」

と少し暗い顔をクロノはした。

なのは「あっ！！」

フェイト「どうしたのなのは？」

なのは「あのね、お母さんとお父さんに竜夜君を連れて来てって言われてたの」

フェイト「翠屋に？」

なのは「うん」

蒼助「今から行けばまだ間に合うかもよ」

なのは「うん、そうだね」

と言ってなのはは、竜夜を追いかけて行った。

それにしても竜夜は何者何だろ？

フェイトｓｉｄｅ　ｏｕｔ

竜夜ｓｉｄｅ

あれから俺はキラがハッキングして手に入れた地図でアースラから戻った。出た場所は入った場所と違う所だったが。

キラ『竜夜、大丈夫？』

竜夜『何が？』

キラ『さっきの』

竜夜『ちゃんとではないけど大丈夫だ』

キラ『……そう』

とキラと念話していたら

なのは「竜夜君！！」

となのはが追いかけて来た。

竜夜「なんだ高町」

なのは「あのね「言っとくがさっきの事は」違うの！！」

竜夜「じゃあ何のようだ？」

なのは「あのねお母さんとお父さんが竜夜君にお礼が言いたいって」

竜夜「遠慮する」

あの二人にあったら面倒なことになる

なのは「でもせっかく前まで来たんだから……」

なにを言っているんだ？と思っていたら、

キラ『竜夜、左』

と言われ左を見たら翠屋があった

最悪なんだけど

第十一話　やば死んだかも（後書き）

予告よりも早く更新できた！！

竜夜「遊んでる暇あるのかよ」

……

キラ「無いんだ？」

……うるせー

竜夜「ちなみにアンケートに参加してくれた皆様本当にありがとうございます！！」

キラ「予想外にもたくさんの方が参加してくれました」

アンケートで来たキャラや機体は必ず出そうと思っているので楽しみにしていて下さい！！

キラ「次回は出来たら今月中で遅くても1月の最初の週には更新するつもりなのでお楽しみに」

それではまた次回

竜夜「感想待っています！！」

第十二話　来たくなかったのに！！（前書き）

今年最後の更新です！！

前回感想くれた皆様本当にありがとうございました！！

出来たらまた感想を書いてください

では、第十二話をどうぞ！！

第十二話　来たくなかったのに！！

最悪だ何で翠屋に来ちゃうんだよ

キラ『てっきりきっり気付いているのかと思ってたよ』

竜夜『そんなわけない無いだろキラ』

キラ『まあ、覚悟は決めたほうがいいよ』

そんなことを話していたら……

？「あら、お帰りなのは」

なのは「あっ、ただいま、お母さん！！」

高町桃子登場……逃げ場ないじゃん

桃子「あら……その子が……」

なのは「うん、火ｓ「久しぶりですね、桃子さん」えっ？」

桃子「ええ、久しぶりね……竜夜君」

なのは「あの、お母さん」

桃子「何？なのは」

なのは「竜夜君と知り合いなの？」

まずいあの人の性格なら……

桃子「あら、なのは覚えてないの？小さいころ夜なのはの事を送って来てくれた子よ」

なのは「えっえーーー！！」

ばらしたよ人が必死に隠していた事を……

というかなのは何故俺の方を見て顔を少し俯いて赤くしてるんだ？

キラ『やっぱりそうなんだ』

竜夜『何がやっぱりそうなんだだよ』

キラ『まあ、僕が言う事じゃないから』

竜夜『だから何なんだよ！！』

桃子「ところで竜夜君、翠屋に上がるわよね？」

竜夜「いや、帰りたいんですk「上がるわよね？」……はい」

いやだってさあんな何か裏に恐い何かが見えたら断られないでしょと桃子さんの後ろを付いて行った。

桃子「ほら、なのは行くわよ」

なのは「へっ、ひゃい」

いや大丈夫ですかこの娘

キラ『いや多分竜夜のせいだと思うよ』

竜夜『いや、なんで』

キラ『それは自分で気ずかないと』

竜夜『いや、だからなんなの！！』

とキラと話しながら俺は翠屋に入った。

何故こうなった？

恭也「さあ始めよう」

何故俺は士郎さんの家の道場で恭也さんと向かいあって木刀を構えている？

と俺は少し前の事を思いだしていた。

翠屋に入った俺が最初に話しかけられた相手は、士郎さんだった

士郎「久しぶりだね竜夜君」

竜夜「ええ、お久しぶりです、士郎さん」

全く来たくなかったのに

士郎「さて何か飲むかい？」

と士郎さんが聞いてきた。ちなみに桃子さんは他の客の接待をしている

竜夜「じゃあコーヒーで」

まださっきの甘さが口に残ってるからな

なのは「ねえ、竜夜君」

竜夜「なんだ高町」

なのは「お父さんとも知り合いなの？」

竜夜「そうだけど」

なのは「ねえ、なんでお父さんとお母さんは名前なのに私は名字なの」

竜夜「いや、別に関係ないだろ高m「なのは」いやだかr「なのは」

……なのは、これでいいのか」

なのは「うん！！」

何故急に笑顔になる

キラ『此処まで来ると何なんだろ』

竜夜『だからなにが！！』

？「おい」

竜夜「んっ」

と呼ばれた方を見ると……シスコンがいた

恭也「お前が火紫竜夜か」

竜夜「そうですけど」

恭也「そうか……こっちに来い！！」

と無理矢理道場に拉致られた俺

と冒頭に戻る

竜夜「何でさ」

運命の正義野郎の気持ちがわかった

恭也「なのはが欲しかったら俺の屍を越えろ！！」

意味分からないんですけど

なのは「／／／」

あの何故顔を赤くしているんですか
しかもシスコンは余計気が立っているし

恭也「さあ……逝こうか」

竜夜「絶対に字が違う！！」

士郎「さて試合を始めようか」

竜夜「とゆか士郎さん店は！！」

士郎「ん、ああ問題ない、桃子にたのんだからな」

……なんで俺の周りにはまともな大人がいないんだ

士郎→親バカ

桃子→魔王

恭也→シスコン

美由紀→影が薄い

……鬱になりそう

士郎「さて試合開始！！」

とシスコンとのバトルが始まった

第十二話　来たくなかったのに！！（後書き）

なんとか間に合った。
竜夜「ぎりぎりだけどな」

キラ「間に合っただけ良いんじゃない」

キラありがとう、竜夜次回覚悟しておけ

竜夜「なっ作者てめー！！」

キラ「あはは？、さて変な所で終わらせて済みません」

切りが良いと思ってあそこで切りました。
次回はもう少し長くするつもりなので

竜夜「感想を出来たら下さい！！」

キラ「それではよいお年を！！」

感想待ってまーす！！

お正月記念　竜夜とキラの設定と能力（前書き）

どうも明けましておめでとうございます！！
お正月記念に以前リクエストで設定が見たいとの事で書きました

それでは後書きで

お正月記念　竜夜とキラの設定と能力

火紫　竜夜　（１０）

ステータス　Ｆａｔｅ風

（）はリミッター時

魔力　ＥＸ（なし）

筋力　ＡＡ＋　（Ｂ）

耐久　ＳＳ　（Ａ＋）

敏捷　ＳＳ＋　（Ｂ）

幸運　Ｃ

スーパーコーディネーター

レアスキル

１．ＳＥＥＤ　全てのランクが三上がる。空間認識がＳＳＳＳになる。

宝具

エクスカリバー　Ｓ＋最強の剣。　別名、約束された勝利の剣

オリジナルゆえランクが少し高い。

アヴァロン　最強の盾であり癒しの効果もある。
好きな物
読書　昼寝　飯　料理
ガンダム
嫌いなもの
面倒なこと　なのは魔王時　管理局

自殺して転生した転生者　原作に関わりたく無いといいながら何かと巻き込まれる。
神から餞別でいくつか武器などを貰っているが基本使わない（エクスカリバーは違う）
転移魔法が下手でたまに変な世界に行く。（次元世界や異世界）一度仮面ライダーカブトの世界に行き天道の弟子になり料理を教わったので料理のうでは桃子並みやそれ以上。親友しか知らない過去がある。（スイーツは桃子の方が上）

容姿　肌の色はキラと同じで髪と目は黒い、顔は上の中、本人はきずいていない

デバイス　フリーダム

ＡＩ　キラ・ヤマト

モード１　セイバーモード
このモードの姿はキラのオーブのパイロットスーツに青いマントを

付けた姿
武器はエクスカリバー　ビームライフル×２　　ビームサーベル×２

モード２　フリーダムモード
姿や武器は全てＳＥＥＤのフリーダムと同じ。速さはだいたいフェイトの２．５倍ぐらい

モード３　エクシアモード
姿や武器は００のエクシアと同じ。ただ魔力は特殊になっていてＡＭＦも意味が無い。　現在、００ガンダムに改造中。

特殊なシステム

トランザム

魔力を全体に放出して一定時間の間能力が全て三倍になる。

だが一定時間が過ぎると魔力がしばらく使えなくなる。

２．クロックアップ

自分だけが超神速の速さで動ける。
だいたい０．１秒を５分の用に動ける。

一日十回しか使えない。

ガンダムＳＥＥＤの主人公、Ｄｅｓｔｉｎｙでは途中から出たのにもかかわらず主人公のシンよりも人気だった。竜夜のデバイスという状態を越え親友的な存在。
竜夜の事を心配しながら自分と同じ過ちを繰り返させないようにしたり、たまに竜夜をからかう。竜夜の過去を知る数少ない者の一人

特殊なデバイスでバリアジャケットを複数入れられる。演算や処理能力は普通のデバイスより圧倒的に優れている。

お正月記念　竜夜とキラの設定と能力（後書き）

竜夜「明けまして」

キラ「おめでとうございます」

さあ、正月最初の更新は設定です

竜夜「ところで魔力がＥＸってどんなチートだよ」

キラ「うん僕の方もバリアジャケットが複数はね……」

大丈夫だ。まだ隠し設定があるから

竜夜「……おい作者調子にのるな」

キラ「竜夜落ち着いて！！」

それでは次回は本編です

竜夜「お正月中には更新は使用と思っていますので」

キラ「次回もお楽しみに！！」

第十三話　めんどくさい（前書き）

前回感想で台本式をどうにかしろと言われてた結果が後書きです

それでは第十三話どうぞ

感想待っています

第十三話　めんどくさい

はぁ～めんどくさい

前回恭也さんの攻撃を現在全部避けてます。
士郎さんと戦った時も思ったけどあんたら何の能力もないのにチートだろこの強さは

恭也「何時まで避けるつもりだ！！」

現在試合が始まって１０分ぐらいたった

竜夜「……」

何時になったら諦めてくれるかな～

キラ『竜夜少しは真面目にやったら』

キラが何か言っているが気にしない

恭也「……ならば！！」

と言って神速を使って来た。

……仕方がない

竜夜「ＳＥＥＤ発動」

と頭の中で種が割れた気がした瞬間、周りがクリアに見えて、恭也

さんの動きが見えた
そして攻撃が来た瞬間にそこに木刀を出した
恭也「なに！！」
まあ、ビックリするよな普通
さて、そろそろ終わらせるか

竜夜ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

士郎ｓｉｄｅ

試合が始まって１０分がたったが相変わらず凄いね竜夜君は
なのは「ねえ、お父さん」
士郎「どうしたなのは」
なのは「竜夜君と何時知り合ったの？」
美由紀「確かに気になるよね」
途中から来た美由紀も話しに入って来た

士郎「僕が彼に会ったのは僕が大怪我をして病院に入院していた時だよ」

なのは「えっ」

美由紀「どうゆう事なのお父さん」

士郎「大怪我していた僕は気がついたら目の前に彼がいてね、彼が僕の怪我を治してくれていたんだ」

なのは「えっ、そうなの」

士郎「うん、そして数分で僕の怪我を完治させたよ。魔法でね」

なのは「だから、お父さんは私が魔法を使っているのを知っていたの？」

士郎「うん、彼からなのはの状況と魔力が有るのを教えて貰ったからね」

美由紀「そうなんだ」

なのは「……」

士郎「まあ、その時に怪我が完治したかを知るために病室を抜け出して彼と試合をしたんだ」

なのは「結果はどうなったの？」

美由紀「やっぱりお父さんが勝った？」

士郎「……僕が負けたよ、本気でやったのに物の見事にね」

なのは「えっ」

美由紀「怪我が完治してなかったんじゃ」

士郎「いや、怪我は完治していたよ。戦っていてそれが確認出来たしね。純粋に彼が僕よりも強かったんだよ」

なのは「……」

美由紀「……」

まあ、二人共言葉を失ってるね、まあ確かに僕の強さを知っている二人からしたらありえないだろうね

さて、試合は……

と試合に目を戻したら恭也が神速を使った

さて、そろそろ終わりかな

と恭也の負けを予想をせざらなかった

士郎ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

竜夜ｓｉｄｅ

恭也「何故わかった」

竜夜「……純粋に直感です」

恭也「悪いが本気で行くぞ」

竜夜「こっちも面倒なんでもう終わらせるます」

と言った瞬間に全力で神速を使って来たよ……大人げ無いだろ

と来た攻撃をＳＥＥＤを使って全て防いだ後、恭也さんが持ってい

た木刀を破壊して、首に木刀で殴って（うざかったから）終わらせた

竜夜「ふぅ」

と息をついたら、

士郎「お疲れ様」

竜夜「……もう帰っていいですか？」

士郎「正直な話し、まだお礼をしていないし、桃子も話しが有ると言っていたが？」

竜夜「……」

嫌なんですけど。でも帰ったら絶対に家まで来て高町流ＯＨＡＮＡＳＩだからな……泣きたい

キラ『竜夜、どんまい』

はぁーとため息をしながら士郎さん達の後に続いて行った

恭也さんを道場に置いて来た気が……まあ、いいか

第十三話　めんどくさい（後書き）

今年初の本編更新

竜夜「疲れた」

キラ「というか台本式はやめたんじゃないの」

止めようとしたんだけどあまりしまらなくて……さてきおとり治して高町編第二話どうでしたか？

竜夜「というか高町編だったんだ」

キラ「うん、以外だったね。てっきり何物考えて無いのかと思ったんだけど」

それは酷いぞキラ

竜夜「いや、普通にそうに思う」

キラ「まあ、そんなに言わなくても……」

言った本人が言うなよ……まあいいやキラ次回予告よろしく！！

キラ「ははは？それじゃあ次回は高町家で恭也さんに勝った竜夜は桃子さんに言われた事は次回　死刑宣告でしょそれは　お楽しみに！！」

竜夜「感想をお願いします」

次回の更新は多分2月だと思います

第十四話　死刑宣告でしょそれは（前書き）

二月前に間に合った

重大発表が後書きであります

ではどうぞ

第十四話　死刑宣告でしょそれは

あの後、恭也さんをそのままにして俺の前には桃子さんがいます

桃子「ねぇ竜夜君」

竜夜「な、何ですか」

威圧感たっぷりで何をしようと！！

桃子「なのはから聞いたけど一人暮らしなんですってね」

竜夜「そ、それが」

桃子「ゴールデンウィークの間家に泊まらない？」

竜夜「えんりょｓ「泊まるわよね」……はい」

恐すぎるよこの人！！

竜夜「せ、せめて荷物ぐらい取りに行きたいんですけど」

桃子「まあ、それぐらいならいいわよただし士郎さんと一緒にね」

竜夜／士郎「はい」

逆らえねぇーよ絶対

士郎「竜夜君済まない」

竜夜「いやあれはしょうがないと思います」

それにしてもよく士郎さん体が持つな

士郎「はは、もう割り切ったよ」

キラ「苦労してますね」

と辺りに人がいないのを確認してからキラが喋った

士郎「キラ君か、久しぶりだね」

キラ「ええ、お久しぶりです」

と三人？で話しながら俺の家についた

竜夜「じゃあ士郎さんは玄関で待っていて下さい」

士郎「わかったよ」

と士郎さんが玄関で待っている間に2階で服やらを用意していたら

下から、電話が鳴った

急いで下に降りて電話に出たらソーマからだった。

何の用だと思いながら出た

竜夜「何の用だソーマ？」

？［残念ハズレだ］

竜夜「その声勇斗か？」

勇斗［ああ正解だ］

竜夜「珍しいな、お前が地球での任務だなんて」

勇斗［デストロイの件でな、少し聞きたいんだがあのフリーダムは……］

竜夜「ああ、俺だ」

勇斗［珍しいなお前がなのは達に関わるなんて］

竜夜「巻き込まれたんだよ」

勇斗［ふ、それは災難だったな］

と楽しそうに言ってきた

竜夜「そうだ、お前がいるならクルスもいるだろ」

勇斗［ああ……済まない今はいない］

クルスめ逃げたか、まあいい

竜夜「ならクルスに伝言を頼む」

勇斗［何だ？］

竜夜「別に任務で来るのはいいが何で姿を隠すんだ、と頼む」

勇斗［わかった］

竜夜「それで本題は」

勇斗［ああ、今ソーマに代わるから聞いてくれ］

とソーマと代わった

ソーマ［竜夜か？］

竜夜「今さら何だ」

ソーマ［冗談だ、本題は今日帰ったらティーダから連絡が来てな］

竜夜「用件はなんなんだ？」

ソーマ［久しぶりに有給休暇とボーナスが出たらしくてな、明日ティアナとも一緒に遊園地はどうかだそうだ］

遊園地か断……まてよ明日から

竜夜「何日間だ？」

ソーマ［確か二日だと「行く！！」そ、そうか］
これで高町家から出る口実ができた
竜夜「それにしてもよくティーダさんが誘ったな」
恭也さん程では無いがシスコンなのに
ソーマ［ティアナが俺達が一緒がいいと言ったらしい］
なるほどな
竜夜「勇斗達もいくのか？」
ソーマ［ああ、一応な］
竜夜「そうか」
ソーマ［それにしても何でお前は家にいなかったんだ？］
竜夜「……アースラに連行されて、高町家に行き、シスコンとバトルしていた」
ソーマ［……ま、まあ誰にでもな、そ、そうゆう事はあるさ］
お前、同情するぐらいなら代われ
竜夜「なら明日何時だ？」
ソーマ［１０時だそうだ］
竜夜「わかったじゃあ明日な」

ソーマ［ああ］

と俺は電話を切った

さて高町家を明日出る口実が出来たけど今日は……恐いな

とそんな事を考えながら残りの準備をして家を出た

その後、ご飯をご馳走になり、風呂から出て寝ようと思ったが此処で気づいた

竜夜「俺、何処で寝ればいいんだ？」

士郎「ああ、今空いてｉぐはぁ」

えっ

桃子「悪いけどまだ掃除が終わって無いからなのはの部屋で一緒に寝てくれる？」

死刑宣告でしょそれ！！

竜夜「いやいやいやまずいでしょ！！」

恭也「まっｔギャーーー！！」

美由紀「恭ちゃんは黙る」

まずいこうなったら

竜夜「なのはが嫌がる「私は別にいいよ／／／」……」

終わった

桃子「じゃあ竜夜君は今日はなのはの部屋でね」

最悪だーーーー！！

第十四話　死刑宣告でしょそれは（後書き）

お久しぶりです

竜夜「その前に反省しろダメ作者！！」

キラ「どうしたの竜夜？」

あ～あ受験生なのに小説書いていること？

竜夜「それもそうだが違う」

キラ「もしかしてあれ」

何だっけ？

竜夜「お前この小説の更新が６月までしないとはどういう事だ！！」

キラ「あ～あその事ね」

済みません竜夜が言った通り約６月まで更新が止まります

理由はこの小説を修正したい事が出まくったからです

この先思いの外アンケートでオリキャラが来たので最初から修正しないと噛み合わなくなってしまうので

竜夜「６月までは長いんだよ」

キラ「でも約だからね」

全部の話しの修正が終わり次第なので少し早くなるかもしれません
ですので楽しみにしている方々は待っていて下さい

竜夜「それと最後に感想を下さい」

キラ「前回、一件も無かったので出来たら誰か書いてください」

それでは次回は未定ですので

竜夜「楽しみにしていてください」

キラ「それではまた！！」

第十五話　嵐の前の静けさ（前書き）

遅くなって本当にすみませんでしたー＞m（__）m＜

色々用事が重なったりなど本当に楽しみにしていた方々には申し訳ありませんでした

そして短くてごめんなさい

夏休みの中には3話ぐらいは書きたいと思っています

それでは

第十五話　嵐の前の静けさ

「ん、知らない天井だ」
と俺が目を覚ましていった最初の一言だった。
『ふざけた事言ってる暇あるの？』
『だって、だってさおかしいだろこれ』
『……否定はしないよ』
『なんで、なんで、なのは、が横にいるんだよー！！』
そう何故か昨日別々の布団で寝たはずのなのはが俺の横で寝ている
『夜寝ぼけたんじゃない？』
勘弁してくれと俺は思いながら布団から抜け出した
「今、何時だ、キラ？」
『6時半だよ』
早く起きすぎたな、と考えながら俺は着替えて一階に降りた
「あら、竜夜君もう、起きたの？」
下に降りたら、桃子さんがいた。つい先程まで翠屋の厨房で仕込みをしていたのか、薄らと汗が浮かんでいる。

「ええ、まあ桃子さん、……これから朝飯の準備ですか？」
「そうよ……そういえば、竜夜君って一人暮らしよね？ご飯はいつもどうしてるの？」
と疑問に思ったのか聞いてきた
正直聞いて欲しくないんだけど
「一応自分で作っていますけど」
「そうなの……ねぇ竜夜君」
と桃子さんがとってもいい顔で聞いてきた
……嫌な予感しかないんだけど
「な、何ですか、桃子さん」
と俺が桃子さんの後ろの何かにおびえながら言い返したらとんでもないことを言ってきた。

『めんどくさかった……なんで自分で作る必要がないのに』
『いくら言っても作ったんだし作るの好きでしょ』
『確かにそうだけださ～』
ちなみに現在朝食の途中だ
「ん、桃子、いつもよりご飯やおかずがうまいな腕をあげたな」

「本当においしいよ母さん！！」

「うん、うん、おいしい！」

「ものすごくおいしいの！」

はあ～早く食わないとな～と場違いなことを考えていたら

「……ほんとにそうね～ここまでとは思ってなかったんだけど」

と場の空気が凍った

「「「へっ？」」」

「ちょっと待ってくれ、これは桃子の作った料理じゃないのか？」

「この料理を作ったのは竜夜君よ」

とまた場の空気が凍った

「小学生に負けた……」

「同じ男として……」

「同い年でなんでこんなに…違うの」

反応は三者三様だけどなんでみんな落ち込んでいるんだよ

「ほ、本当に竜夜君が作ったのかい？」

「……一応ですけど」

と答えたらさらに恭也さんと美由紀さんとなのはがさらに落ち込んだなんなんだよまったく

「ようやく着いた」

「でもよかったの勝手に出てきて？」

とキラが聞いてきたがまあ、

「大丈夫だろ、一応書置きしたし、昨日の内に士郎さんに話しておいたし心配なのは……」

「士郎さんが桃子さんにＯ・Ｈ・Ａ・Ｎ・Ａ・Ｓ・Ｉされないかだよね……」

回想

「も、桃子どうゆうつもりなんだい」

「大丈夫よ士郎さん別に竜夜君が出かけるのを黙っていたか聞きたいだけよ」

「じゃあその縛っているくさｒ「もう一度だけよ」……竜夜君に黙っていて欲しいと頼まれて！！」

「……そう少しだけＯ・Ｈ・Ａ・Ｎ・Ａ・Ｓ・Ｉが必要ね」

「ちょっと待ってｋあああああああ！！」

回想終了

「やばい想像ができた……」

「帰ったら謝ろうよ竜夜」

「そうだな……」

と遠い目をしていたら

「どうしたんだ？」

と勇斗が大丈夫かコイツみたいな顔を後ろでしていた

第十五話　嵐の前の静けさ（後書き）

竜夜「作者弁解したいことはあるか」

キラ「……」

私がすべて悪いです

竜夜「つまり死刑でかまはないと？」

……

キラ「無言は肯定だよ」

竜夜「判決を言い渡す……ＳＬＢの刑だ」

えっ

キラ「じゃあ、なのはちゃんよろしく」

なのは「うん…スターライト……」

ちょっとm

なのは「だめ♪ブレイカー！！」

ぎゃあああああああああああああああー！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3851n/

魔法少女リリカルなのは 最強なのに介入したくない転生者

2011年9月8日10時54分発行